

女子大学生の座席選択行動と 学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性

川西千弘

問題

講義科目を担当していると、座席を指定しているわけではないのに各学生が好んで着席する座席が学期を通じてほぼ一貫している様子に気づくことがある。彼らは、どのような目的や動機及び心理的要因でそのような行動をとっているのだろうか？

教室における座席選択行動と学習意欲・態度の関連については多くの研究がなされている。例えば織田（1980）は、学生の座席選択行動と教師の座席観察行動を研究する中で、前方に着席する大学生は受講意欲が高く積極的に授業に参加し、教師への反応もよく出席率や成績が良好であるのに対し、後方に着席する学生は卒業単位確保のために授業に参加し、私語、内職、居眠りなど受講態度に問題が多く、学習意欲が乏しいことを報告している。また、Millard & Stimpson（1980）は、座席選択行動が成績と関連する可能性は低いが、教室における興味や関心に反映され、前方に着席する学生のほうがその授業に対する好みや関心が高く、参加意識や学習動機も優れていることを明らかにしている。この他、教室の前方に座る学生ほど授業に対する注意力に優れ（Schwebel & Cherlin, 1972）、よい成績を取ることを重要と考え、他者から知的かつ独創的と見られたいという思いが強い（Walberg, 1969）、など様々な報告がなされている。これらを総合すると、教室内での座席選択が学習者の自由意志に委ねられている場合、学力や成績との関連は一貫したものではないが、座席選択位置と学習意欲や態度には密接な関連性があり、前方を好む学生は学習

意欲や態度が良好であるのに対し、後方を好む学生はそれらに問題があることになる。

一方、座席選択行動とパーソナリティの関連性についても検討が進められている。例えば、Hillmann, Brooks, & O'Brien, (1991) は、座席選択行動と自尊心の関連について検討し、前方に着席する学生のほうが後方を選択する学生より総合自尊心とその下位概念である自己信頼や自己統制感で高い自己評価を示した。また、Mercincavage & Brooks (1990) は、座席選択行動と達成動機の関連を探り、大学1回生においては前方に着席する学生のほうが後方に着席する学生より達成動機が高いが、2・3回生ではこのような差は見られず、達成動機のより詳細な項目と座席選択行動との関連を精査する必要があると述べている。この他、向性との関係では、外向的で学習意欲のある大学生は内向的な大学生より窓側前方の席を好むが、外向的でも学習意欲のない大学生は内向的な大学生より窓側、廊下側と後方の座席を好む傾向が確認されている(織田・森、1982)。さらに、前方に着席する学生は後方に着生したがる学生より特性不安が低いことも明らかにされている(Rebeta, Brooks, O'Brien & Hunter, 1993)。これらを考慮すると、自尊心やその他の自己の特性において優れていると思う学生は、自信を背景に教室においても積極性を表出しやすいと考えられる。

さて、上述したように座席選択行動は学習意欲・態度及び様々なパーソナリティと密接に関連することが示唆されているが、これらの研究ではどのような授業における座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性なのかについては詳細な議論がなされていない。つまり、授業には学生の動機づけを触発させる様々な要因が潜在しており、その要因の存在の有無が座席選択行動と学習意欲・態度或いはパーソナリティとの関連にどのように交絡しているのかを検討することが必要である。そこで、本研究では授業における学生の動機づけを左右する要因として、先生への好悪感情、授業内容のおもしろさ及び授業の必修・選択を取り上げ、それぞれの授業における座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性について具体的に検討することにした。

坂本(2005)は、学生の授業評価と授業参加への自己評価の関連を調べたところ、「教員と学生のコミュニケーションは十分とれていた」などの教員の“授業中の学生への接し方”と「授業内容は興味深いものだった」などの“学生を引きつける授業”は、いずれも「私は私語をすることもなく、真剣に授業を受けた」などの“学生の授業態度の自己評価”と有意な正の相関があることを見いだしている。このことは、好感情を持つ先生の授業やおもしろい授業では、学生の授業への好意・関心・意欲及び参加意識などの内発的動機づけが高まるために、学習意欲・態度や心理変数の個人差の表出が抑制されるが、悪感情を持つ先生の授業やおもしろくない授業では、授業そのものへの関心・意欲・参加意識など内発的動機づけを触発することが困難なために、個人の学習意欲・態度及び心理的問題点が顕現化しやすくなるかもしれない。さて、上述した先生への好悪感情や授業内容のおもしろさが学生の内発的動機づけを高める要因であるとしたら、学生の外発的動機づけを高める要因についても考慮する必要があるだろう。そこで、本研究では授業の必修・選択についても併せて測定することにした。必修の授業は、その内容や先生の質に関係なく単位取得しなければ卒業できない科目であり、そのため学生は「単位を取るために授業に参加する」或いは「出席をとるので授業に参加する」といった外発的動機づけが高まる。そのため、必修の授業では学生本来の学習意欲・態度或いはパーソナリティの問題が払拭されるが、選択の授業では単位取得が学生の自由意志に委ねられるため、個人の学習意欲・態度及び心理的問題が表出されやすくなると思われる。ただし、内発的動機づけと同様の抑制効果が外発的動機づけにも存在するかは疑問の残るところであり、この点についても精査が必要である。以上のことから、本研究では場面想定法を用い、条件を提示しない座席選択行動を計量すると共に、好きな先生の授業、嫌いな先生の授業、おもしろい授業、おもしろくない授業、必修の授業、及び選択の授業の各条件についても併せて座席選択行動を測定し、これらの条件の相違が座席選択行動と個人の学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性に対していかなる影響を及ぼすのかを具体的に検討することにした。

さて、前述したように教室における学生の座席選択行動はパーソナリティとも密接な関係があるとされているが、これまでの研究では自尊心、特性不安及び向性などいわゆる性格に関する心理変数が主に取り上げられていた。しかし、大学生の実体をより詳細に把握するなら、大学生だからこそ陥りやすい病理現象や不適応現象に着目し、これが学習行動に及ぼす影響を検討することが必要であろう。そこで、本研究ではステューデント・アパシー（以下ではS・アパシーと記す）、大学生生活不安及び大学への帰属感の個人差を測定し、これらの心理変数が座席選択行動や学習意欲・態度に如何に関連するのかを検討することにした。S・アパシーは、自らの意志で改善することが全く不可能な慢性的無気力状態のことで、勉学への意欲が喪失し、自発的・能動的行動が消失して学業継続が困難になるとされている。大学生がこのような病理現象を呈する原因として、我が国では過酷な入試に備えての過剰学習や不本意入学による不適応などが指摘されている（山口正二、心理学事典P14）が、S・アパシーは精神病理的側面と大学生の青年期課題に関わる発達心理的側面とが混在する多面性を持つ（下山、1996）ため、その発生機序や障害概念について現在も様々な議論が続けられている。ただし、本研究では大学の授業に参加している学生を調査対象とするために、宗像（1997）に準じ病体水準が深刻なものではなく一般学生にも見られるS・アパシー傾向についての個人差を測定することにした。なお、宗像（1997）はこのS・アパシー傾向を①生きがい・目標・進路の喪失②情意の減退③自己否定④優劣勝敗への過敏さ⑤受動性⑥交友の関係の貧困の6つの特徴を持つと解釈し、尺度構成を行っている。

また、大学生生活不安は、近年の大学生が将来に対する見通しどころか、幼児期を引きずり、少年期も満足にクリアできていない精神的未熟さ（藤井、1998）を抱えている、と同時に自分でも客観化できない様々な不安を抱えており、これが学校不適応を引き起こしているという考えから、一般の大学生がもつ生活面及び精神面の不安について様々な角度から検討したものである。藤井（1998）は大学生生活不安が、大学での先生や学友との対人関係や生活費など大学での日常生活全般に関わる不安、テストや成績などの評価や授業中の学習・発表に関

する不安、そして入学した大学のレベルや相性に関する不安の3つの下位概念から構成されることを突きとめ、それに基づいて尺度構成を行っている。

さらに、本研究では大学への帰属感についても併せて検討することにした。そもそも、帰属感とは集団への同一化やその集団に留まりたいという残留希望及びその集団の目標・規範・価値の受容などによって表象される概念であり、企業を対象とした調査では、その集団への満足感や課題意欲に肯定的影響をもたらすことが示唆されている（金城、三隅、山田、吉田、桜井、篠原、関、三角、松田、&城戸、1995）。しかるに、大学生という青年期にはアイデンティティー確立という発達課題があるが、このアイデンティティーには社会的アイデンティティーも重要な要素となる。社会的アイデンティティーとはある集団に属することによって獲得される自己概念であり、その集団の成員としての感情や価値観を反映するものとされ、人は自分の所属集団と自己を同一化し、その集団の肯定性を自己に取り込むことによって自己評価を高めようとする（加来、1987）と考えられている。このような心理過程を考慮すると、自分の所属する大学に対してどのような感情を抱き、そこに所属することをどのように捉えているかは、大学生の自我形成と学習行動に大きく関わる心理変数と考えられる。

以上、本研究では、座席選択行動と学習意欲・態度及びS・アパシー、大学生活不安、大学への帰属感という3つのパーソナリティ変数の関連性について検討するとともに、学生の動機づけを左右する授業の要因（つまり、先生への好悪感情、授業内容のおもしろさ及び授業の必修・選択）がそれらの関連性にいかなる交絡をもたらすのかを詳細に検討することにした。

方 法

調査参加者

女子大学生109名で、その内訳は2回生102名、3回生4名、4回生3名であった。

手続き

授業終了後調査協力を依頼し、承諾した学生のみに以下の質問紙を配布し、適宜回収した。

1, 質問紙の構成 属性（学科、専攻、学年）を尋ねた後、座席選択行動尺度、S・アパシー尺度、大学生生活不安尺度、大学への帰属感尺度、そして学習意欲・態度尺度の順で質問紙を構成した。

2, 使用尺度 (1) 座席選択行動尺度 教室の模式図（図1）を提示し、「図1の教室で授業を受けるとしたら、あなたはA～Eのうちどの座席に着席しますか？ただし、座席は黒板からAは2m、Bは4m、Cは6m、Dは8mそしてEは10mという具合に2mずつ離れていく距離にあると仮定します」という教示に

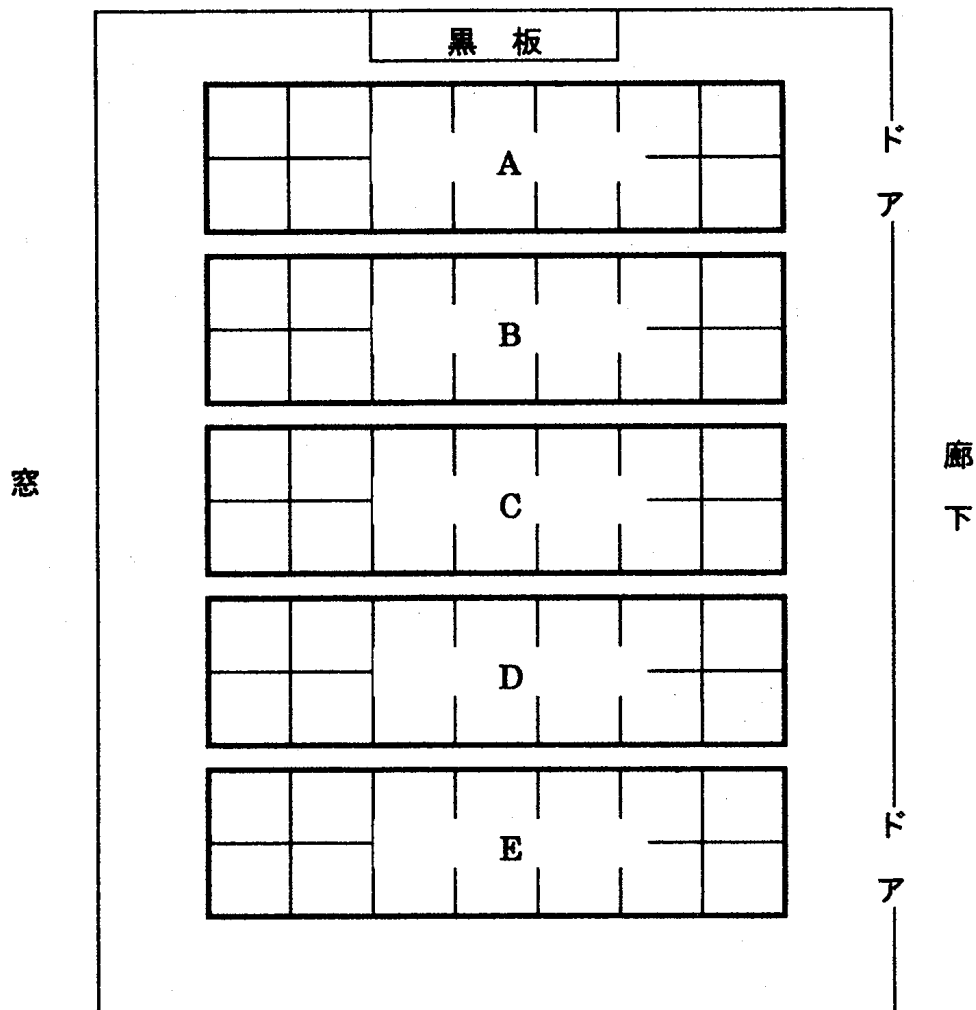


図1 質問紙で用いた教室の座席位置

より、着席する座席を1つ選択させた。その後、同様の方式で「では以下の①～⑥の条件があるとき、どの座席に着席しますか？」という質問に、各々の条件における座席選択位置をA～Eのうち1つ選択させた。各条件は、①好きな先生の授業時、②嫌いな先生の授業時、③おもしろい授業内容の時、④おもしろくない授業内容の時、⑤必修の授業の時、⑥選択の授業の時の6つであった。なお、Aは2、Bは4、Cは6、Dは8そしてEは10として数値化した。

(2) 学習意欲・態度尺度 意欲低下領域尺度(下山,1995)のうち学業意欲低下及び授業意欲低下に関わる6項目に「学習目標を決めてもめったに成功しない」「おもしろくない勉強でも、それが終わるまでがんばる」など8項目を付け加えて尺度を構成した。それぞれの項目について、「非常にあてはまる7」から「全くあてはまらない1」の7件法で評定させた。

(3) S・アパシー尺度 S・アパシー尺度(宗像,1997)の18項目とS・アパシー心理性格尺度(下山,1995)の9項目の計27項目を用いた。選択した項目は各尺度の下位尺度において因子負荷量が高く、また概念が重複しないものとした。それぞれの項目について、「非常にあてはまる7」から「全くあてはまらない1」の7件法で評定させた。

(4) 大学生生活不安尺度 大学生生活不安尺度(藤井,1998)のうち、サークルに関するものなど全ての学生には当てはまらない項目及び他の尺度と概念が重複する項目を削除した21項目を用いた。それぞれの項目について、「非常にあてはまる7」から「全くあてはまらない1」の7件法で評定させた。

(5) 大学への帰属感尺度 Evans&Jarvis, (1986、Hogg (1992)に転載)の集団への態度を測定する20項目の中から、集団への同一化や帰属感及び連帯感を測定すると思われる11項目を選択し、その項目の中の「集団」という言葉を「大学」に置き換えて大学への帰属感を測定する尺度とした。それぞれの項目について、「非常にあてはまる7」から「全くあてはまらない1」の7件法で評定させた。

結 果

各尺度の因子分析結果

1, **学習意欲・態度尺度** 14項目に対して主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。その結果、固有値の変化は5.02、1.51、1.15、1.04・・・というものであり、回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性から2因子解が妥当であると判断した（累積寄与率46.63%）。各因子ごとに因子負荷量0.40以上の項目を抽出した。

第1因子は10項目で構成されており、「難しそうなことは新たに学ぼうとは思わない」「学習目標を決めてもめったに成功しない」など勉強に対する意欲の無さや努力回避また自主的に学習する姿勢の無さといった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「学習意欲低下」因子と命名した。第2因子は3項目で構成されており、「何となく授業をさぼることがある」「授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある」など、授業出席意欲の無さや授業課題に対する無関心や不履行といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「授業意欲低下」因子と命名した。

なお、Cronbachの α 係数を算出したところ、「学習意欲低下」で0.839、「授業意欲低下」で0.798であり、いずれの因子も内的一貫性があると判断した。

2, **S・アパシー尺度** 27項目に対して主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。その結果、固有値の変化は8.66、2.32、2.04、1.71、1.33、1.21・・・というものであり、回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性から4因子解が妥当であると判断した（累積寄与率54.56%）。因子ごとに因子負荷量0.45以上の項目を抽出した。

第1因子は6項目で構成されており、「自分の将来といっても現実感がない」「自分はいったい何をして生きていったらよいかわからない」など自分の将来に対する不安や自分なりの生き方がつかめないとといった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「未来不安定」因子と命名した。第2因子は6項目で構成されており、「いつも惨めで気持ちが浮かない」「何をするにもやる気がでな

い」など、意欲がなく自己の存在の希薄感や生きることへの憂鬱といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「抑うつ」因子と命名した。第3因子は7項目で構成されており、「自分の欠点にいつも悩んでいる」「自分から人に働きかけて何かをするのは苦手だ」など自信のなさや自主的に行動することの困難といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「自信欠乏」因子と命名した。第4因子は5項目で構成されており、「心を打ち明けられる友人がない」「友人とは表面的にしかつきあわない」など対人関係の希薄さと不信といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「対人関係困難」因子と命名した。

なお、Cronbachの α 係数を算出したところ、「未来不安定」で0.845、「抑うつ」で0.828、「自信欠乏」で0.806、「対人関係困難」で0.788であり、いずれの因子も内的一貫性があると判断した。

3, 大学生生活不安尺度 21項目に対して主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。その結果、固有値の変化は6.82、2.14、1.64、1.19、1.12・・・というものであり、回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性から3因子解が妥当であると判断した（累積寄与率50.51%）。因子ごとに因子負荷量0.46以上の項目を抽出した。

第1因子は8項目で構成されており、「申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配だ」「必修科目の成績が不可だったらどうしようと心配になる」など単位取得や成績に対する不安といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「評価不安」因子と命名した。第2因子は5項目で構成されており、「大学の先生と話をするときとても緊張する」「授業で発表するとき声が震えることがある」など、先生に対する緊張感や授業中の失敗に対する不安といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「授業態度不安」因子と命名した。第3因子は3項目で構成されており、「こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になる」「入学した学部が自分に合っていないような気がして不安だ」など自分が所属する大学や学部に対する不適應に対する不安といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「大学不適應」因

子と命名した。

なお、Cronbachの α 係数を算出したところ、「評価不安」で0.862、「授業態度不安」で0.801、「大学不適応」で0.713であり、いずれの因子も内的一貫性があると判断した。

4, 大学への帰属感尺度 11項目に対して主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。その結果、固有値1以上及び回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性から3因子解が妥当であると判断した（累積寄与率60.78%）。各因子ごとに因子負荷量0.31以上の項目を抽出した。

第1因子は5項目で構成されており、「私は自分の大学が好きである」「私はこの大学に満足していない（逆転項目）」など大学に対する好意及び大学に所属することの満足度といった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「大学肯定感」因子と命名した。第2因子は3項目で構成されており、「私はこの大学に関わっていると感じる」「この大学に何が起ころうと私は気にならない（逆転項目）」など、大学への関心と関与の深さといった内容の項目が高い負荷量を示していたので、「大学関与度」因子と命名した。第3因子は3項目で構成されており、「この大学がどうなるかによって私自身が変わることになる」「もし私の大学が時代に合っていないといわれたら私は悲しむだろう」など自分と大学が強く結びついているという感覚に関する内容の項目が高い負荷量を示していたので、「大学一体感」因子と命名した。

なお、Cronbachの α 係数を算出したところ、「大学肯定感」で0.824、「大学関与度」で0.598、「大学一体感」で0.514であり、後者2因子についてはいずれも項目数が少ないことから、 α 係数が十分な値とはいえないが、ある程度の内的一貫性が保証されていると判断した。

各尺度の下位因子ごとに平均値と標準偏差を算出し（表1～3）、以下の分析に用いた。なお、学習意欲・態度尺度、S・アパシー尺度及び大学生活不安尺度については得点が高いほど次元名に沿ってネガティブな心理状態を示すが、大学への帰属感尺度では逆に次元名に合わせてポジティブな心理状態を示すように数値化した。

表1 各座席選択行動の平均と標準偏差

	平均値	標準偏差
条件なしの座席	5.35	2.55
好きな先生の授業の座席	4.02	2.02
嫌いな先生の授業の座席	7.13	2.32
おもしろい授業の座席	4.17	1.93
おもしろくない授業の座席	7.39	2.25
必修の授業の座席	4.78	2.20
選択授業の座席	5.81	2.44

表2 学習意欲・態度の平均と標準偏差

	平均値	標準偏差
学習意欲・態度全体	3.85	1.20
学習意欲低下	4.23	1.04
授業意欲低下	3.45	1.70

表3 各パーソナリティ変数の平均と標準偏差

	平均値	標準偏差
S. アパシー全体	4.25	0.92
未来不安定	4.81	1.27
抑うつ	4.11	1.30
自信欠乏	4.63	1.07
対人関係困難	3.44	1.20
大学生生活不安全感	4.25	0.99
評価不安	4.83	1.31
授業態度不安	4.08	1.35
大学不適應	3.84	1.41
帰属感全体	3.73	0.81
大学肯定感	3.86	1.22
大学関与度	3.79	1.05
大学一体感	3.53	1.10

座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性

座席選択行動（条件なし及び①～⑥の各条件における座席選択）と学習意欲・態度、S・アパシー、大学生生活不安及び大学への帰属感の各尺度の関連性を探るために、座席選択行動と各尺度全体及び下位因子ごとにスピアマンの順位相関係数を算出し、表4に示した。

表4 座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性

		条件なし の座席	好きな先 生の授業 の座席	嫌いな先 生の授業 の座席	おもしろ い授業の 座席	おもしろ くない授 業の座席	必修の授 業の座席	選択の授 業の座席
ステ ュー デ ン ト ア パ シー	アパシー全体	.222*	.142	.175	.187	.103	.212*	.273**
	未来不安定	.339**	.178	.219*	.232*	.194*	.255**	.347**
	抑うつ	.282**	.135	.221*	.175	.173	.200*	.264**
	自信欠乏	.154	.173	.043	.163	.085	.139	.231*
	対人関係困難	.059	.055	.040	.046	-.058	.079	.067
大 学 生 活 不 安	大学生生活不安全体	.036	.110	.059	.140	.093	.122	.120
	評価不安	.034	.092	-.026	.112	.064	.041	.057
	授業態度不安	.006	.091	.041	.153	.018	.126	.094
	大学不適應	.088	.078	.125	.083	.075	.127	.114
帰 属 感	帰属感全体	-.127	-.101	-.199*	-.107	-.197*	-.158	-.174
	大学肯定感	-.048	-.034	-.074	-.063	-.005	-.122	-.091
	大学関与度	-.195	-.180	-.308**	-.193*	-.261**	-.318**	-.294**
	大学一体感	.009	.054	-.031	.058	-.196*	.065	-.024
学 習 意 欲	学習意欲・態度全体	.335**	.144	.249**	.230*	.290**	.251**	.256**
	学習意欲低下	.373**	.278**	.247*	.276**	.299**	.285**	.347**
	授業意欲低下	.246*	.058	.193*	.162	.197*	.194*	.152

** p<0.01, * p<0.05

1, 条件なしにおける座席選択行動と各尺度との関連性 まず、学習意欲・態度との関連では、座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点その下位次元

である「学習意欲低下」及び「授業意欲低下」の両次元との間でいずれも有意な正の相関が見られた（「授業意欲低下」は5%水準、その他は1%水準）。またS・アパシーとの関連では、座席選択行動と「S・アパシー」全体得点、その下位次元である「未来不安定」、「抑うつ」との間で有意な正の相関が見られた（「S・アパシー」全体得点は5%水準、その他は1%水準）。しかし、大学生活不安や大学への帰属感では、特に顕著な関連性は見いだされなかった。

2. 学生の動機づけを触発する授業要因を含めた分析

(1) **好きな先生の授業時の座席選択行動と各尺度との関連性** 好きな先生の授業時の座席選択行動と「学習意欲低下」のみで、1%水準で有意な正の相関が見られた。しかし、S・アパシー、大学生活不安及び大学への帰属感では、特に顕著な関連性は見いだされなかった。

(2) **嫌いな先生の授業時の座席選択行動と各尺度との関連性** 学習意欲・態度との関連では、嫌いな先生の授業時の座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点の間で1%水準、「学習意欲低下」及び「授業意欲低下」の両次元の間で、いずれも5%水準で有意な正の相関が見られた。また、S・アパシーとの関連では、座席選択行動と「未来不安定」、「抑うつ」との間でいずれも5%水準で有意な正の相関が見られた。さらに、大学への帰属感では、座席選択行動と「大学への帰属感」全体得点及びその下位次元である「大学関与度」との間でいずれも有意な負の相関関係が見られた（前者は5%水準、後者は1%水準）。しかし、大学生活不安では特に顕著な関連性は見いだされなかった。

(3) **おもしろい授業時の座席選択行動と各尺度との関連性** 学習意欲・態度との関連では、おもしろい授業時の座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点及び「学習意欲低下」の間で正の相関が見られた（前者は5%水準、後者は1%水準）。また、S・アパシーとの関連では、座席選択行動と「未来不安定」との間に5%水準で正の相関が見られた。さらに、大学への帰属感では座席選択行動と「大学関与度」との間に5%水準で有意な負の相関関係が見られた。しかし、大学生活不安では特に顕著な関連性は見いだされなかった。

(4) **おもしろくない授業時の座席選択行動と各尺度との関連性** 学習意

欲・態度との関連では、おもしろくない授業時の座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点、「学習意欲低下」及び「授業意欲低下」との間で有意な正の相関が見られた（「授業意欲低下」は5%水準、その他は1%水準）。また、S・アパシーとの関連では、座席選択行動と「未来不安定」との間に5%水準で正の相関が見られた。さらに、大学への帰属感では、座席選択行動と「帰属感」全体得点、「大学関与度」及び「大学一体感」との間で有意な負の相関関係が見られた（「大学関与度」は1%水準、その他は5%水準）。しかし、大学生活不安では特に顕著な関連性は見いだされなかった。

(5) 必修授業時の座席選択行動と各尺度との関連性 学習意欲・態度との関連では、必修授業時の座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点、「学習意欲低下」及び「授業意欲低下」との間で有意な正の相関が見られた（「授業意欲低下」は5%水準、その他は1%水準）。また、S・アパシーとの関連では、座席選択行動と「S・アパシー」全体得点、「未来不安定」及び「抑うつ」との間で有意な正の相関が見られた（「未来不安定」は1%水準、その他は5%水準）。さらに、大学への帰属感では、「大学関与度」との間に1%水準で有意な負の相関関係が見られた。しかし、大学生活不安では特に顕著な関連性は見いだされなかった。

(6) 選択授業時の座席選択行動と各尺度との関連性 学習意欲・態度との関連では、選択授業時の座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点及び「学習意欲低下」との間にいずれも1%水準で正の相関が見られた。また、S・アパシーとの関連では、座席選択行動と「S・アパシー」全体得点、「未来不安定」、「抑うつ」、及び「自信欠乏」との間にいずれも有意な正の相関が見られた（「自信欠乏」のみ5%水準、その他は1%水準）。さらに、大学への帰属感では、座席選択行動と「大学関与度」との間に1%水準で有意な負の関連が見られた。しかし、大学生活不安では特に顕著な関連性は見いだされなかった。

学習意欲・態度とパーソナリティの関連性

学習意欲・態度とパーソナリティの関連性についても副次的分析することにした。学習意欲・態度とS・アパシー、大学生活不安及び大学への帰属感の尺

度及び下位因子においてどのような関連性があるのかを確認するためにピアソンの相関係数を算出し、表5に示した。

表5 学習意欲・態度とパーソナリティの相関係数

	学習意欲・ 態度全体	学習意欲低下	授業意欲低下
S・アパシー全体	.440**	.538**	.290**
未来不安定	.481**	.582**	.314**
抑うつ	.451**	.423**	.358**
自信欠乏	.344**	.517**	.179
対人関係困難	.224*	.326**	.125
大学生生活不安全体	.403**	.548**	.235*
評価不安	.324**	.492**	.154
授業態度不安	.287**	.434**	.147
大学不適応	.282**	.291**	.212*
帰属感全体	-.335**	-.222*	-.298**
大学肯定感	-.257**	-.161	-.243*
大学関与度	-.451**	-.372**	-.382**
大学一体感	-.004	.056	-.020

** p<0.01、 * p<0.05

1, 学習意欲・態度とS・アパシーの関係 「学習意欲・態度」全体得点と「S・アパシー」全体得点との間に1%水準で有意な正の相関が見られた。また下位尺度ごとにみると、「未来不安定」「抑うつ」は「学習意欲低下」と「授業意欲低下」いずれにも1%水準で有意な正の相関がみられた。また、「自信欠乏」と「対人関係困難」は「学習意欲低下」のみと1%水準で有意な正の相関が見られた。

2, 学習意欲・態度と大学生生活不安の関係 「学習意欲・態度」全体得点と「大学生生活不安」全体得点の間には1%水準で有意な正の相関がみられた。また下位尺度ごとにみると、「大学不適応感」は「学習意欲低下」と「授業意欲低下」いずれにも有意な正の相関が見られた（前者は1%水準、後者は5%水準）。また、「評価不安」「授業態度不安」は「学習意欲低下」の間に1%水準

で有意な正の相関がみられた。

3, 学習意欲・態度と大学への帰属感的関係 「学習意欲・態度」全体得点と「帰属感」全体得点との間には1%水準で有意な負の相関が見られた。また下位尺度ごとにみると、「大学関与度」は「学習意欲低下」と「授業意欲低下」いずれにも1%水準で有意な負の相関がみられたが、「大学肯定感」は「授業意欲低下」のみと5%水準で有意な負の相関が見られた。

考 察

本研究は、女子大学生の教室における座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティ変数であるS・アパシー、大学生生活不安及び大学への帰属感的関連性を検討するとともに、学生の動機づけを左右する授業の要因（つまり、先生への好悪感情、授業内容のおもしろさ及び授業の必修・選択）がそれらの関連性にいかなる交絡をもたらすのかを明らかにすることを目的とした。

まず、授業に関する要因を考慮しない座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性では、条件なしの座席選択行動が学習意欲・態度全体やその下位尺度である「学習意欲低下」及び「授業意欲低下」の両次元と密接な関連を持ち、勉学に対する意欲や自主性の無さ及び努力を回避する傾向が強いほど、また授業への出席意欲の無さや課題に対する無関心・不履行といった授業への意欲・関心が希薄なほど、後方座席を選択することが明らかになった。また、パーソナリティ変数との関連では、条件なしの座席選択行動とS・アパシー全体及びその下位尺度である「未来不安定」や「抑うつ」と有意な関連を持ち、将来への不安や自分なりの生き方がつかめないなど自分の未来を否定的に展望している学生ほど、また意欲がなく自己の存在の希薄感や生きることへの憂鬱を抱いている学生ほど、後方の座席を選択することが示された。

また、学生の動機づけを左右する授業の要因を加味した調査では以下のことが明らかになった。まず、先生への好悪感情については、好きな先生の授業時では、「学習意欲低下」のみで正の相関が見られた以外は座席選択行動とその

他の学習意欲・態度及びパーソナリティ変数の間には有意な関係が見られなかった。これに対し、嫌いな先生の授業時では多くの心理変数との間で相関関係が確認された。つまり、座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点「学習意欲低下」「授業意欲低下」「未来不安定」及び「抑うつ」とは正の相関が、「帰属感」全体得点「大学関与度」では負の相関が見られ、学習や授業に対する意欲が減退したり、自分の未来目標が曖昧だったり、抑うつ感が強く、大学への関与が希薄であるほど後方座席を選択しやすいことが示された。これらのことは、少なくとも勉強意欲そのものが低下していない限り、好きな先生の授業では学生の内発的動機づけが高まり、これが個人の抱えている様々な心理的問題を凌駕して座席選択という行動に影響を及ぼさなくなるが、嫌いな先生ではそのような学生の内発的動機づけが働かないために、自分の心の問題が噴出・起因して座席行動を決定づけ、後方座席へ退きたくなる傾向に直接反映されるものと思われた。

次に、授業内容のおもしろさの要因については、おもしろい授業で座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点、「未来不安定」「学習意欲低下」との間で正の相関が「大学関与度」では負の相関が確認された。これに対し、おもしろくない授業では、座席選択行動と「学習意欲・態度」全体得点、「学習意欲低下」「授業意欲低下」及び「未来不安定」との間で正の相関が、「帰属感」全体と「大学関与度」「大学一体感」では負の相関が見られた。おもしろくない授業では嫌いな先生の授業時と同様、学生の内発的動機づけが高まらないために、個人の学習意欲・態度及び心理的病理や帰属感の希薄さが座席選択行動に顕現し、その様な問題を抱えた学生は後方座席を嗜好することが示された。しかし、おもしろい授業では好きな先生と同様学生の内発的動機づけを高めるにもかかわらず、好きな先生ではみられなかった「未来不安定」や「大学関与度」との間に関連が確認され、授業内容がおもしろくても、自分の未来を肯定的に展望できず、大学にコミットメントできないほど後方の座席を選択することが明らかになった。授業内容のおもしろさは、先生への好悪感情と同様直接座席選択行動に差を生じさせる要因である〔先生への好悪感情及び授業内容のおもしろ

さによって学生の座席選択行動に相違があるのかどうかを検討するために各々の要因で座席選択行動の値を基に1要因分散分析を行った。その結果、先生への好悪感情の主効果と授業内容のおもしろさの主効果が共に有意になり(順に $F(2.198) = 106.26$, $F(2.196) = 111.99$, 共に $p < .01$)、TukeyHSDの多重比較をしたところ、好きな先生、条件なし、嫌いな先生の順、及びおもしろい授業、条件なし、おもしろくない授業の順で前方の座席を選択することが明らかになった。座席選択行動の平均値は表1に記載)。それにもかかわらず、好きな先生において見られなかった関連性がおもしろい授業時に確認された背景には、個人空間という視点を導入して以下のような考察が可能であろう。北川(1998)は教室における座席選択を学生が望む教師との関係の空間的表現と見なせると述べ、教壇から1~2mにある前方座席は教師との個人的水準の相互交渉を望み、3~5mの中央座席は教師と公的關係での相互交渉を、そして6~9mの後方座席は教師との相互交渉を望んでいないことを予想できるとしている。よって、好きな先生ではこのような教師との相互交渉を視野に入れた座席選択行動が起こるので、個人的な未来不安定さや大学への関与の希薄さを凌駕するが、おもしろい授業では先生との相互交渉のあり方は考慮されないために、これらの心理変数の個人差と座席選択行動との関係が顕現化したものと推察された。

一方、学生の外発的動機づけを触発させる授業の必修・選択の要因については、必修・選択共に座席選択行動と「学習意欲・態度」及び「S・アパシー」全体得点、「学習意欲低下」「未来不安定」「抑うつ」との間に正の相関、「大学関与度」との間では負の相関が確認され、学習に対する意欲が低下していること、自分の未来への不安や生きる目的の不確定さを抱くこと、うつ的心理状態に陥ること及び大学への関与の希薄さが後方の座席を選択させることに関与していた。この他に必修授業でのみで座席選択行動と「授業意欲低下」との間で正の相関がみられ、必修授業という外発的動機づけがあるにもかかわらず、授業に対する意欲そのものが低下している者はより後方の座席を選択することも併せて示された。また、選択授業のみで座席選択行動と「自信欠乏」との間で正の相関が見られ、自分に対する自信の欠如が直接座席選択行動に結びつき、

後方の座席を選択させることに繋がっていた。ただし、これらの傾向は条件なしの座席選択行動で見られた関連性と類似しており、好きな先生の授業で確認された様々な関連性を凌駕する現象とは異なるものであった。このことは必修授業という学生の外発的動機づけを触発する要因は、学生の内発的動機づけを触発する要因ほど、座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティ変数との関連性に有力な影響を持たない可能性を示唆している。実際、座席選択の値自体を比べても必修の授業のほうが選択の授業より前方の座席を選択するが、条件なしとはいずれの授業でも差がみらなかった。(ただし、座席選択行動の値を基に必修・条件なし・選択における1要因分散分析の結果、主効果 $F(2.198) = 15.39, p < .01$) これは、座席選択行動における外発的動機づけの影響が大きいことの傍証といえよう。

さて、本研究では座席選択行動と大学生活不安の関連性がどの授業においても鮮明ではなかった。自由に座席選択可能なとき、前方に着席している学生に対して、教員はかれらが学業に自信を持って積極的に授業参加していると思いがちである。しかし、前方に着席する者の中には、授業不安や評価不安が高く、これを補填するためにそういう行動をしている学生がいるのである。また大学に対して不適応感や授業・勉学への不安を多く抱えている学生は、教員が持つ権威や心理的圧力から遠ざかるために、或いは不安故の消極さのために後方の座席を選択すると考えがちであるが、本研究の結果はその様な考えを裏づけるものではなかった。大学生が抱えている不安は複雑であり、それらが座席選択行動という行動指標に少なくとも直線的に表現されるものではないようだ。今後は大学生が抱える不安の諸相をより詳細に検討し、彼らがどのような行動でそれらを表出するのかについて調査していく必要があるだろう。

本研究は、大学生の座席選択行動が学習意欲・態度や大学における様々な心理変数とどのような関連性があるかを検討したが、その中でいくつかの問題点も指摘しうる。第1に、本研究では座席選択行動に対してより複雑な分析を可能にするため、教室内の前後の直線的距離における座席選択行動を尋ねた。しかし、これは教室を特殊に単純化した回答方法であり、実際の教室では左右軸

や教壇からの角度も有用な指標と考えられる。より一般化した知見を得るにはこれらを考慮に入れた座席選択行動について検討することが必要である。第2に、本研究では座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティ変数の直接的な関係にのみ焦点を当てたが、これらが複雑に関係し合っただけで間接的影響を及ぼしている可能性がある。どのような心理的問題が学習意欲・態度を経由して、或いは直接的に座席選択行動へ顕現化されるのかといったルートを探索し、全体的な構図を明らかにしていくことが必要である。第3に、実際の座席選択行動は、友人関係に影響されることが多いと推察され、この点を考慮した詳細な検討も必要であろう。教員は、学生をより理解するために、彼らの行動からその心理的問題点を推測する必要に迫られるが、本研究は授業という最も身近な場で展開される座席選択行動がいかなる心理的要因で規定されているのかについて、いくつかの有意な知見を明らかにした。今後は、上記の課題についてより詳細な検討をおこない、学生の教室における座席選択が何を物語っているのかについて更に明らかにしていく必要がある。

引用文献

- 北川歳昭 1998 教室の座席行動と個人空間 —教師への距離の調整としての学生の着席位置— 実験社会心理学研究, 38, Vol2, 125-135.
- 金城 亮・三隅二不二・山田 昭・吉田道雄・桜井幸博・篠原しのぶ・関 文恭・三角恵美子・松田良輔・城戸紀子 1995 企業帰属意識に及ぼすリーダーシップの効果 INSS.Journal 2, 60-76.
- 藤井義久 1998 大学生活不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, Vol6, 441-448.
- Hillmann,R.B.,&Brooks,C.I& O'Brien,J.P. 1991 Differences in Self-esteem of college freshmen as function of classroom seating-row preference. Psychological Record, 41,315-320
- Hogg,M.A 1992 The Social Psychology of Group Cohesiveness (廣田君

- 美・藤澤 等 監訳 1994 集団凝集性の社会心理学 北大路書房)
- 加来慎也 1987 社会心理学用語辞典 小川一夫(監修) 北大路書房 P136
(社会的同一性)
- Mercincavage, J.E & Brooks, C.I. 1990 Differences in achievement motivation of college business majors as a function of year in college and classroom seating position. *Psychological Reports*, 66, 632-634.
- Milland, R.J., & Stimpson .D.V. 1980 Enjoyment and productivity as a function of classroom seating location. *Perceptual and Motor Skills*, 50, 439-444.
- 織田揮準・森 仁美 1982 教室における座席選択行動と学習態度 日本教育工学雑誌, 6, 137-145.
- 織田揮準 1980 学生の座席選択行動と教師の座席観察行動の研究 三重大学教育学部紀要, 3 (4), 55-65.
- Rebeta, J.L., Brooks, C.I., O'Brien, J.P., & Hunter, G.A. 1993 Variations in trait-anxiety and achievement motivation of college students as a function of classroom seating position. *Journal of Experimental Education*, 61 257-267.
- 坂本真士 2005 大学生の授業評価に関する研究 —— 一般的授業選択態度および授業の動機づけの点から —— 大妻女子大学人間関係学紀要 (人間関係学研究), 6, 211-231.
- Schwebel, A.I., & Cherlin, D.L. 1972 Physical and social distancing in teacher-pupil relationships. *Journal of Educational Psychology*, 63, 543-550.
- 下山晴彦 1996 スチューデント・アパシー研究の展望 日本教育心理学研究, 44, 350-363.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 日本教育心理学研究, 43, 145-155.
- 宗像 剛 1997 大学生のアパシー傾向の男女別検討 心理学研究, 67, Vol

6, 458-463.

Walberg, H.J. 1969 Physical and psychological distance in the classroom.

School Review, 77, 65-70.

山口正二 1999 心理学事典 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁
榊算男・立花政夫・箱田祐司（編著）有斐閣 P14（アパシー）